

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 松井 歩

論 文 題 目 現代日本における小規模漁業地域の変容と適応プロセスに関する地理学的研究

(Geographical Study on Transformations and Adaptation Processes of Small-Scale Fishery Regions in Contemporary Japan)

論文審査担当者

主 査 名古屋大学大学院環境学研究科 教授 横山 智

副 査 名古屋大学大学院環境学研究科 教授 高橋 誠

副 査 横浜国立大学教育学部 准教授 池口 明子

論文審査の結果の要旨

日本漁業は 1980 年代以降、それまで操業していた遠洋・沖合の漁場からの撤退や規模の縮小を余儀なくされ、遠洋・沖合漁業から沿岸漁業へと産業構造が転換した。1990 年代になると、沿岸漁業においても生産量・就業者数が減少し、漁業就業者の高齢化が進展した。このような状況下において、本論文では、小規模漁業およびその根拠地となる漁業地域がいかに現代の社会・経済・自然環境の変化に影響されながら適応していくのか、その過程を解明することを目的とした。

本論文は、6 章で構成されている。序章では、日本漁業の縮小再編プロセスに加えて、沿岸域利用の多様化、漁業のグローバル化と資源開発の動向をレビューし、本論文の目的と方法を提示した。第 1 章では石川県能登島を事例として、沿岸漁業に従事する世帯の生業の組み合わせを分析した。漁業者世帯の戦略に合わせて、多様な漁業種類のほか、農業や賃労働、観光業などの他の生業も組み合わせる多様な労働力配分を行いながら、漁家漁業が存立していることを明らかにした。第 2 章では石川県七尾南湾沿岸地域の 3 集落を事例に、生業活動の歴史的展開、土地生産性、漁業外就業機会などの地域条件を比較しながら、漁家の労働力配分を詳細に論じた。第 3 章では石川県能登島沿岸域における漁業とドルフィンツーリズムのコンフリクトの発生要因を、「発見期」、「整備・発展期」、「攪乱期」、「再整備期」という観光業の展開に即して検討した。両者のコンフリクトは、攪乱期において組織・制度的スケールをイルカの行動範囲が越境したことによって発生したことが明らかになり、絶えず変化する生態資源に対して適応的な制度や組織の構築が求められることを論じた。第 4 章では北海道檜山地域の上ノ国、江差、奥尻の 3 地区において、2000 年代以降中国需要の増加にともなって急激に漁獲量が増加したナマコ漁業を事例に、資源の急速な高価値化に対する漁業地域の対応とその地区間の多様性を検討した。特に檜山地域において特徴的にみられるプロダイバー委託のナマコ共同採捕は、資源量と受益者数との関係、そして個人採捕の禁止といった資源管理制度が導入の条件となっていることを解明した。終章では以上の 4 事例をふまえて、社会-生態システムの視角を漁業地域研究に接合させることで、従来別個に議論される傾向のあった事象を小規模漁業地域の変化として一貫した視点から捉えることが可能となることを論じた。

本論文は、日本における小規模漁業の縮小再編という課題を設定し、石川県能登島と北海道檜山地域の国内 2 カ所において、詳細なフィールドワークを実施し、現代日本における小規模漁業地域の変容と適応プロセスを解明した点で、地理学、ならびに水産学などの複数の関連分野に大きな学術的貢献を果たしたといえる。また、本論文の成果は漁業政策や資源管理の研究分野にとっても貴重な成果をもたらし、今後の研究の展開にも期待が持てる。よって、本論文の提出者、松井歩氏は、博士（地理学）の学位を授与するにふさわしいと判断した。